



縄文土器 (赤浜Ⅱ遺跡)



土偶 顔 (赤浜Ⅱ遺跡・縄文時代)



赤彩壺 (夏本遺跡・奈良時代)



鉄鏃 (夏本遺跡・平安時代)



土偶 足 (赤浜Ⅱ遺跡・縄文時代)



甕 (夏本遺跡・奈良時代)



縄文土器 (松磯遺跡)



縄文土器 (赤浜Ⅱ遺跡)

第45回 埋蔵文化財展

発掘された大槌町の歴史

岩手県立埋蔵文化財センター

令和6年 / 11 / 2 - 4
土 月・祝

大槌町文化交流センター
おしゃっち

主催 岩手県立埋蔵文化財センター
(公財) 岩手県文化振興事業団



大型磨製石斧 (赤浜Ⅱ遺跡・縄文時代)



海辺の縄文時代の集落

大槌湾に面した赤浜Ⅱ遺跡は、波打ち際までわずか150m、標高1～8mのごく低い場所のゆるやかな斜面にあります。この場所から縄文時代の長い間営まれた、大きな集落や祈りの場が見つかりました。



東側調査区 ロングハウス壁際の細長い溝が見られます

前期のロングハウス

縄文時代前期の集落は東側調査区の比較的標高の高い場所に営まれていました。住居は建て替えが何度も行われており、長さ14～15m、幅5m前後のとても細長い建物です。床に火を焚いた炉の跡が複数認められます。このような建物は集団で行う作業に使ったり、複数家族が一緒に住んでいたのではないかと考えられています。

一部の住居の埋土からはおよそ6,200年前の十和田の火山噴火により飛んできた中ちゅうせり振火山灰が堆積していたことが注目されます。



矢印の示す白っぽい層が十和田中ちゅうせり振火山灰です

中期の大きな集落

縄文時代中期の集落は遺跡全体に広がっており、30軒の竪穴住居が見つかりました。北側と西側に隣接する町教育委員会の調査区とあわせると80軒を超えます。

この時期の住居は、床の中央付近に石で囲った炉が設けられています。石で囲った部分が複数つながる大きな複式炉もあります。特に西側の調査区では、このような住居が何棟か重なっており、同じ場所に好んで暮らしていたことがわかります。



重なって見つかる中期の竪穴住居

石を連ねた祈りの場

縄文時代後期の遺構は、東側調査区の標高の低い場所に広がっています。住居の数は少なくなりますが、石を並べたり、柱状や板状の大きな石を立てたりした配石遺構が作られました。配石にはいくつかのまとまりがありますが、全体としては列状に連なっています。

このような施設はお墓の可能性がありますが、赤浜Ⅱ遺跡の配石の下部には石を立てるための小さな掘り込みは見られたものの、お墓のような穴はありませんでした。具体的な用途は不明ですが、石を連ねたり、立てたりすることに意味があるものと考えられます。大槌湾の静かな海と周りを取り囲む山々が、当時の人々の魂に触れ、祈りの場所にふさわしい景色だったのかもしれません。

配石遺構より標高の低い場所には、後期の土器や石器を多く含む包含層が広がっており、珍しい形の土器や人をかたどった土偶が多く出土しました。



後期の配石遺構



縄文時代後期の壺や注口土器



土偶

縄文時代の食料貯蔵場所

鯨山から船越湾に向かって延びる尾根の緩斜面にある遺跡で、田屋遺跡に隣接しています。

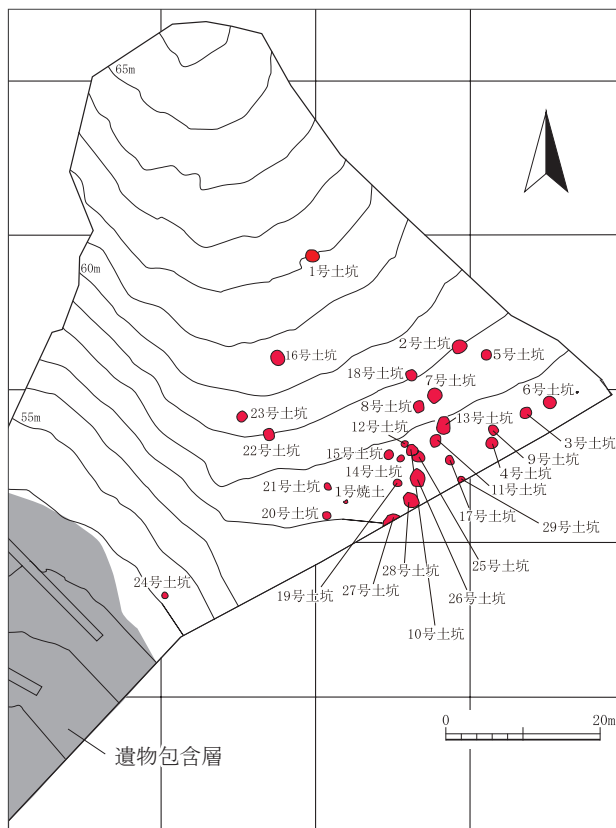
今回の調査区は縄文時代中期の集落の貯蔵穴群にあたります。見つかった土坑23基は、底が口よりも広く、断面が実験で使うフラスコのような形をしています。この形はきちんと蓋をすると、外の空気が入りにくいので中の温湿度が変わりにくく、食物の貯蔵に適していると言われています。

住居群は調査区内にありませんが、これまでの調査例から斜面の下方にあると考えられます。



断面がフラスコ状の土坑

三陸沿岸道路により平成25・26年度調査 ・縄文時代中期(およそ4,800年前)の貯蔵穴群



遺構配置図 竪穴住居は調査区内にはありません





三陸沿岸道路建設により平成26～29年度調査

- ・ 縄文時代前期(およそ6,200年前)の包含層
- ・ 平安時代(およそ1,000年前)の製鉄遺跡

製鉄工房 中央に炉があります

鉄づくりの工房

三陸沿岸では、平安時代から豊富な砂鉄を原料に鉄づくりが盛んに行われていました。

田屋遺跡でも、砂鉄から鉄分を取り出す工程と取り出した鉄分の純度を高める工程の炉が、計8基見つかりました。工房の下方には、鉄を取り出したかす(鉄滓)や送風管の羽口の破片が、一面に広がっていました。鉄づくりに欠かせない木炭を生産した炭窯も、9基見つかっています。一連の施設は、科学的年代測定により平安時代のものとなりました。

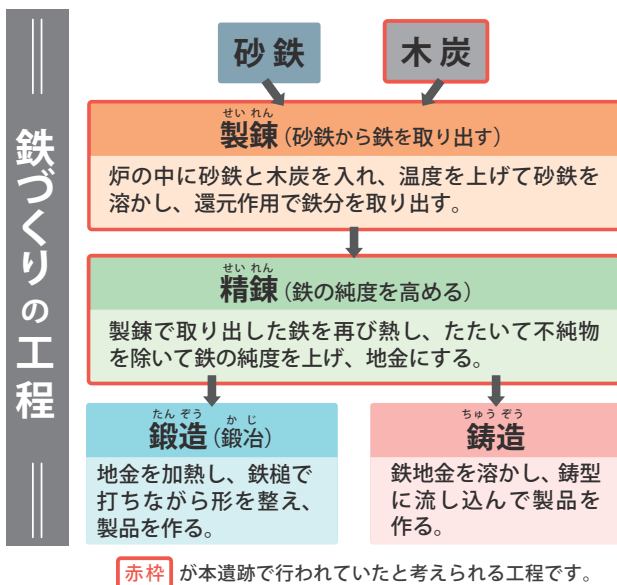
このほか、縄文時代前期と中期の土器が出土しました。



炭窯断面



炉の底部 中に鉄滓などが残っています





国道45号改良工事(大槌バイパス)に伴い昭和62年度に調査

- ・縄文時代中期(およそ4,800～4,500年前)の集落
- ・弥生時代(およそ2,000年前)の集落
- ・奈良時代(およそ1,300年前)～平安時代(およそ1,100年前)の集落
- ・平安時代(およそ1,100～1,000年前)の鍛冶工房

調査風景 西側調査区

夏本遺跡は、大槌川北岸の小さな扇状地上にあり、背後は小鯨山に至る山地です。調査区は、現在の大槌バイパス夏本トンネルの東西両出口付近で、尾根を隔てて東西に分かれています。

縄文時代中期の集落

調査の結果、縄文時代中期の竪穴住居が25軒見つかり、時期により西側調査区から東側調査区と集落が移動していることがわかりました。

このほか貯蔵穴が4基見つかっていますが、住居群の背後の斜面に作られており、居住エリアと貯蔵エリアを分けていたことがわかりました。



竪穴住居

遠方からの宝物も

遺物では、新潟県の糸魚川市で産出するヒスイのペンダントが見つかり、遠方から貴重なものが運ばれていたことがわかりました。



また、口縁部に小さな穴が連続して開けられた大型の赤い壺があります。この土器は中部地方を中心に分布する土器をまねて作られた可能性が高く、県内では珍しいものです。

珍しい弥生時代中期の住居

稲作は弥生時代からと言われていますが、県内でははっきりわかっていません。弥生時代中期には気候が寒くなり、内陸では集落も少なくなります。一方沿岸では、近年発見例が増えています。

夏本遺跡では、この時期の竪穴住居が西側調査区の沢近くから1軒見つかりました。一辺6m前後の隅の丸い方形をしており、石囲炉いしがこいろがあります。

奈良時代の集落

奈良時代の竪穴住居は、西側の調査区から4軒見つかっています。平面形は方形が基本で、壁の一部に煮炊きのためのカマドが付くようになります。カマドは、石を芯にして粘土で覆ってドーム状につくられます。甕かめを入れ、焚口から火を焚くと、煙は煙道を通して住居の外に出ていきます。

当時の家財道具は

焼けた住居から、煮炊きのための大小の甕、食器としての坏つぎ、貯蔵のための壺といった土器がまともに見つかりました。同じ住居には、鉄製品、使い込んだ砥石といし、土製の紡錘車ぼうすいしゃ(繊維によりをかけて糸にするための道具)もありました。

特別な模様の壺

他の住居から、赤い色で模様が描かれた特殊な壺も出土しました。ふつうこの時代の土器には模様や色はありません。このように赤く塗られた土器は、宮城県北部から岩手県では沿岸部も含めて時折見られ、特に北上市の和賀川周辺に非常に多く分布しています。大和政権と蝦夷やまと えみしの間に戦いがあった時期に多いことから、蝦夷の結束を高めるための儀式に使用されたと考える説もあります。

平安時代の鍛冶工房

平安時代になると、東側調査区に工房が作られます。工房からは、複数の鍛冶炉かじろや金床石かなとこいし(加熱した鉄を製品にするためにたたく時の台)、碗形滓わんがたさい(炉の中にたまるため底面がお碗のように丸くなる鉄のかす)、大量の鉄滓てっさい、鍛造剥片たんぞうはくへん(加熱した鉄をたたいた時に飛び散った剥片)のほか、鉄製品も多く出土しました。

これらのことから、この工房では、鉄の純度を高める作業と、その鉄から様々な製品を作る作業が行われていたことがわかりました。遺跡から見つかった鉄製品は、釘てつぞく、鉄鎌、小刀、鎌、馬具の轡くつわなどがあります。

三陸沿岸部では平安時代から江戸時代まで、豊



奈良時代の竪穴住居



上の竪穴住居からまともに見つかった土器



赤彩土器



富な砂鉄を材料に鉄の生産が盛んに行われていたことがわかっています。大槌町内でも、鉄滓などが拾える場所が多く見つかっていますが、発掘調査により夏本遺跡、田屋遺跡で、平安時代の鉄生産の工房が見つかったことは、鉄づくりの実態に迫る貴重な成果です。



三陸沿岸道路建設により平成28年度調査

- ・ 縄文時代早期(およそ9,000年前)と前期(およそ6,600年前)の遺物包含層
- ・ 平安時代(およそ1,100年前)の集落

調査区内の白線部分が平安時代の竪穴住居跡

迫田 I 遺跡は、小鯨山の裾から南に延びる小さな尾根に囲まれた谷にあります。三陸沿岸道路の大槌インターチェンジへの入り口付近です。

平安時代の**墨書土器**が出土

調査の結果、平安時代の集落跡が見つかり、竪穴住居 4 軒を調査しました。住居からは、当時鍋として使用された甕と食器である坏が見つかりました。1 点の坏には横向きに「千」の墨書が認められます。いずれも 9 世紀中ごろから 10 世紀の初めのものと考えられます。

また、住居などは見つかりませんでした。縄文時代早期と前期の土器や石器を含む層が確認されています。



平安時代の住居



上の住居のカマドと煙出(煙突)



包含層から出土した縄文時代早期の土器



前期の土器



墨で「千」と書かれた平安時代の土器



三陸沿岸道路建設により平成28・29年度調査
・戦国時代(およそ500年前)の城館跡

斜面に平場や急峻な切岸をつくり、防御性を高めています

挟田館跡は、小鯨山から大槌川に向かって延びる尾根の先端を堀で区切って造成された戦国時代の城館跡で、館主は不明です。迫田I遺跡の東側に隣接しています。

防御性の高い城館西側を調査

今回の調査区は城館跡の西側部分で、最も高い平場を中心に、急傾斜地に防御の際の足場としての平場「腰曲輪^{こしくるわ}」や通路の「犬走」を配し、容易に攻め込まれないような工夫をしています。

最上段の平場は、狭いながら眺望がよく、物見台として使われたようです。つづく2段目からは竪穴建物が見つかり、見張り要員の詰所としての機能が考えられます。この建物と周辺からは15世紀後半～16世紀前半の中国産や国産の陶磁器が多く出土しており、この時期に防御を高める必要があったものと思われます。鉄製の鎧の部品「小札^{こざね}」や鉄鍬^{てつぞく}も見つかっています。

大槌城とともに敵を挟み撃ち！

挟田館跡の南側には、大槌川を挟んで巨大な山城「大槌城」があります。挟田館は大槌城とともに、遠野方面から大槌川に沿って下ってくる敵や、山田方面から辺地沢を通して来襲する敵の動きを見張り、大槌城下に敵の侵入を防ぐ役割があったと考えられます。



平場2の竪穴建物



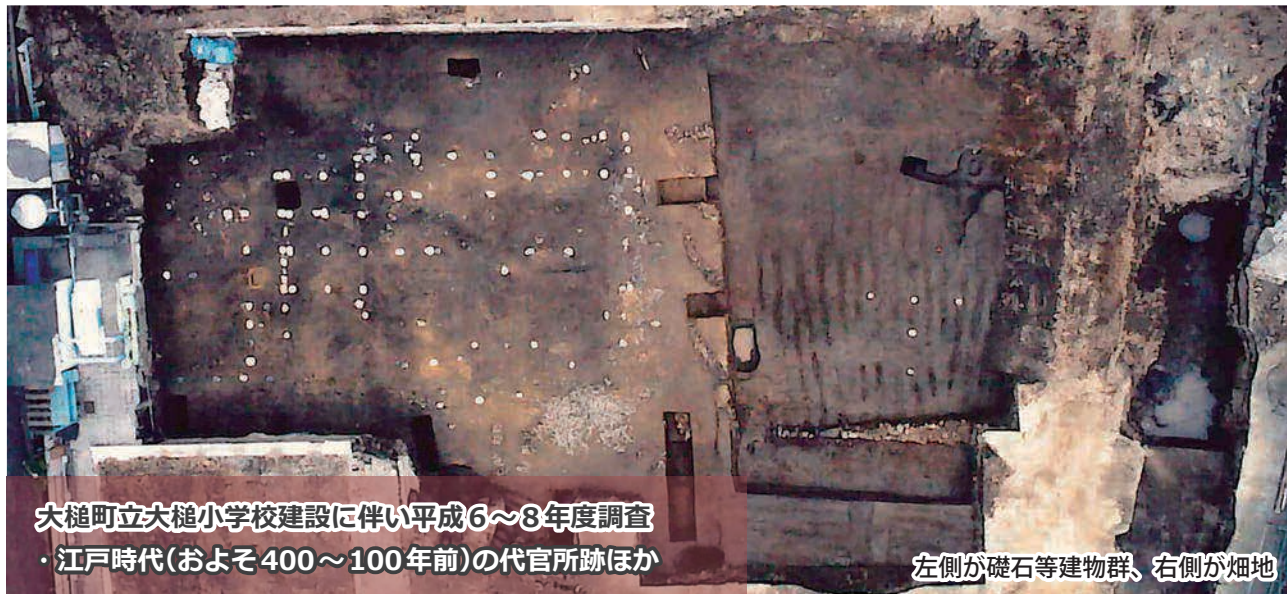
陶磁器



こざね
小札



やじり かりまたぞく
鍬(雁股鍬)



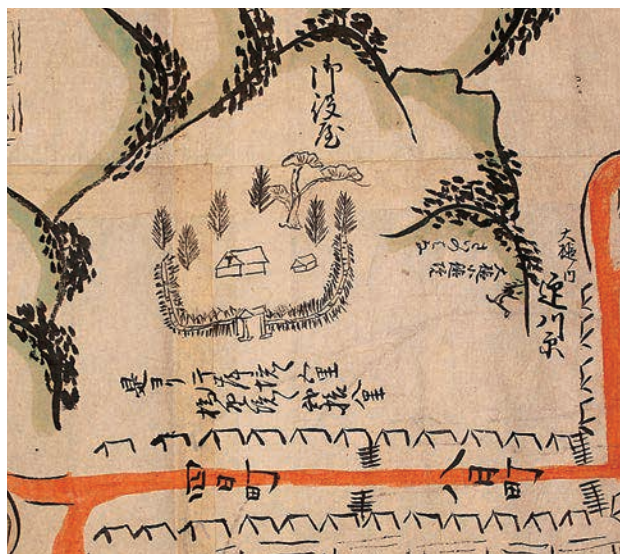
大槌町立大槌小学校建設に伴い平成6～8年度調査
・江戸時代(およそ400～100年前)の代官所跡ほか

左側が礎石等建物群、右側が畑地

大槌代官所跡は、現在の大槌町役場の敷地と重複し、背後の大槌城跡(中世山城)、前方の町方遺跡(町屋域)とともに、前近代における三陸中部の政治・経済・文化の中心として機能しました。

貴重な南部藩の代官所調査

大槌代官所を描いた絵画資料(絵図)は複数残されています。江戸後期の作とされる「大槌通図」では、代官所(御仮屋)の背後に山(城山)が描かれ、前面には浜街道沿いに建ち並ぶ四日町と八日町の町場が見てとれます。代官所の敷地は中央に門を伴う垣根状の区画施設で圍繞され、区画内には大小2棟の建物が描かれています。



大槌通図(もりおか歴史文化館所蔵)

調査の結果、礎石建物1棟、掘立柱建物2棟、敷地内道路、区画施設の杭列(柵木)、井戸枠(桶づみ)と連結する暗渠の木樋(上水道施設)、畑等が見つかりました。

発掘調査報告書では、これらの遺構群と絵画資料を比較し、建物遺構を代官所の官舎と見るには規模が小さく、柱配置も企画性に乏しいこと、また、井戸から続く木樋が前方の町方遺跡(町屋)に延伸していることなどから、遺構群は代官所の構成とは関係しない可能性が指摘されました(町教委2007)。今後、大槌代官所跡の実態解明に迫る課題として取り組んでいきます。



井戸枠と連結木樋の上水道施設



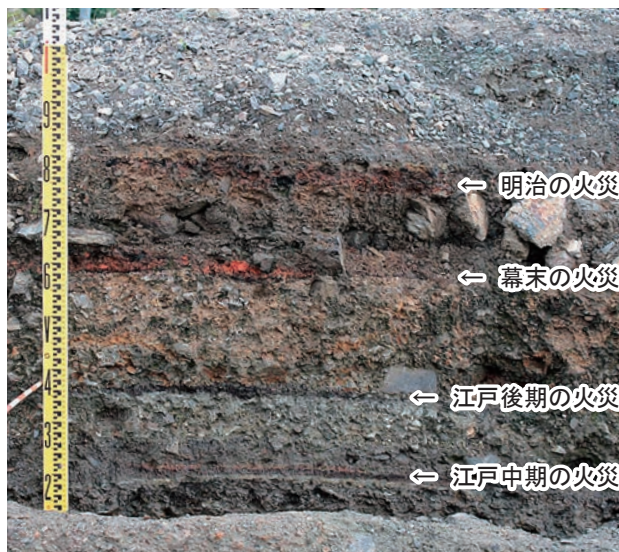
町方遺跡は、大槌川と小鎚川に挟まれた現在の
大槌の市街地に存在する都市遺跡です。中世大槌
氏、近世には南部氏の統治の下、三陸中部の経済
・文化の中心都市として繁栄しました。

三陸沿岸初の都市遺跡調査

江戸時代の大槌は、代官所の前面に造営された
四日町と八日町に月6回市が立ち、経済・文化の
中心として賑わいました。町方遺跡は、四日町と
八日町を包含する都市遺跡です。

調査の結果、度重なる大火や津波で被災しても
なお復興を遂げてきた近世都市の在り方が見えて
きました。発掘区の土層の重なりを把握すると、
複数の焼土層が認められ、火災のたびに盛土や
整地を行い、土地の造成を繰り返していたことが
分かります。また、屋敷地境には水路が引かれ、
多くの自噴井戸の存在から、水との深い関わりが
感じられます。

旧四日町に相当するA区では、高名な私度僧の
慈泉・祖晴兄弟を輩出した商家菊池家の屋敷構え
のほか、簀や切羽等の職人の存在を示す遺物、
旧八日町に相当するB区では木櫃等の家屋の空間
構成、同じく旧八日町に相当するC区では、湧水
を利用した醸造業の一端や火事に備えた穴蔵等が
見つかりました。



土層断面(基本層序)



水路脇に設けられた木櫃

発掘調査でわかった大槌町の遺跡

埋蔵文化財センターでは、昭和62年の大槌バイパス建設関連の夏本遺跡のほか、平成25年以降の東日本大震災からの復興事業関連で5遺跡の調査を行いました。大槌町教育委員会でも、大槌代官所跡などを継続的に調査しています。今回は発掘調査での成果を中心に展示します。

縄文時代

前期では、赤浜Ⅱ遺跡で初めて集落を確認し、大型住居から6,200年前の火山灰を検出しました。

中期には、夏本遺跡など集落や住居の数が増えます。赤浜Ⅱ遺跡は80軒もの住居がある大集落とわかりました。

後期になると、赤浜Ⅱ遺跡で配石遺構が作られました。

調査で出土した遺物からは、赤浜Ⅱ遺跡の北海道産のアオトラ石、夏本遺跡の新潟県産のヒスイなど、遠い地域の貴重なものを手に入れていたこともわかりました。

弥生時代

夏本遺跡で、弥生時代中期の住居が1軒見つかりました。内陸では、この時期の住居は珍しいのですが、沿岸部では近年発見例が増えています。

奈良時代

夏本遺跡で集落が確認され、住居から土器や鉄器、石器などこの時代の家財道具が揃って出土しました。赤く塗られた珍しい壺は、蝦夷の儀礼に使用されたとする説もあり、注目されます。

平安時代

田屋遺跡、夏本遺跡で鉄生産の施設が見つかりました。生産工程のうち、どの作業が行われたかを確認することができ、沿岸地方で盛んな鉄生産の実態解明のため、貴重な資料となりました。

迫田Ⅰ遺跡で出土した墨書土器は、この時代に文字が普及したことを示しています。

戦国時代

挟田館跡では、防御性を高めるための施設や平場の使われ方が確認され、その立地から大槌城との関係もうかがい知ることができました。また、15世紀後半から16世紀前半の遺物が多く、この時期に地域の情勢が緊張していたことがわかりました。

江戸時代

大槌代官所跡では、礎石建物、区画施設等が見つかりましたが、今後、絵画資料との比較などさらなる検討が求められます。また、町方遺跡の調査では、度重なる火災と復興のようすが見られ、畑、水道施設、商家の構など当時の暮らしぶりが明らかになりました。

埋蔵文化財センター調査遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査年度	調査面積(m ²)	事業名	委託者	主な成果
1	赤浜Ⅱ	大槌町赤浜一丁目207ほか	平成26・27年	3,495	土地区画整理事業(赤浜地区)	大槌町	縄文時代前期、中期、後期の集落、後期の配石遺構
2	松磯	大槌町吉里々々第13地割字松磯3ほか	平成25・26年	4,050	三陸沿岸道路建設	南三陸国道事務所	縄文時代中期の貯蔵穴群
3	田屋	大槌町吉里々々第12地割字田屋9ほか	平成26~29年	11,550	三陸沿岸道路建設	南三陸国道事務所	縄文時代前期の包含層、平安時代の製鉄遺跡
4	夏本	大槌町大槌第24地割字夏本48ほか	昭和62年	5,300	国道45号改良工事(大槌バイパス)	三陸国道工事事務所	縄文時代中期、弥生時代中期、奈良~平安時代の集落、平安時代の鍛冶工房
5	迫田Ⅰ	大槌町大槌第15地割字迫田60-1ほか	平成28年	2,600	三陸沿岸道路建設	南三陸国道事務所	縄文時代早期~前期の遺物包含層、平安時代の集落
6	挟田館跡	大槌町大槌第23地割字沢山153ほか	平成28・29年	7,010	三陸沿岸道路建設	南三陸国道事務所	中世城館の一部